

入選 群馬県 佐藤 彩子 様 (40代)

2011年、母が身体障害者になった。しかも身体障害者1級ほどの重度の障害者になってしまった。今までは、健常者以上に元気で陽気で電話に出る声もどこから出しているのかというくらい普段とは違う高い声で、一歩外に出ると“〇〇ちゃん”と声をかけられればなしの近所でも有名くらい明るい存在だった。

地区の行事があれば積極的に参加し、子供会の役員も私たち子どもが子供会を退会するまでずっとやってきた。春には地区の運動会、夏は納涼祭、秋はお祭り、冬はクリスマス会と。なかなかここまでやる人は少なく、一所懸命に子どもたちのことを優先して企画を考えていた。時々近所の子ども達が公民館で悪ふざけをし、母は「あんたたちー！なにやってるの！！」と怒鳴る声も近所中に響いていたのではないかと思うくらいだった。

私が幼少期、近所に一人暮らしをしている生活保護を受けていたおじさんがいた。おじさんは、お酒を飲んで酔っぱらっては叫んで、子どもたちはおじさんが外にいると怖い思いをしていた。ある日のこと、小学校から帰宅する途中で、酔っぱらってるおじさんがいた。学校に戻ろうか猛ダッシュで帰ろうか、悩んでいた矢先、「〇〇ー！こんな真昼間から飲むんじゃないよっ！どうしようもないねー」と大きな声で聞こえてきた。まさかの母だった。私は安心して帰宅することができた。その夜、母にこう聞いてみた。「おじさんが酔っぱらってるのに怖くないの？」と。

母はこう答えた。「おじさんは酔っぱらってる時は、大きい態度をとるけど、正気の際は礼儀正しいおじさんなんだよ」と。そう言われても小学生の私にはよくわからなかったのを覚えている。ただ、酔っぱらって叫んでるおじさんのことを悪く言うこともなく、みんなが嫌がることを率先して行動してた母に対して、まさに「母は強し」この言葉があてはまるなと感じた。

数年が経った頃、母の体を悪病が徐々に蝕んできた。体重は減り元気だったころの半分になり、まだ50代なのに80歳以上のおばあちゃんみたいな容姿になっていった。もちろん体力はない。いつしか自転車にも乗れなくなった。その頃、同時進行で視力も低下していき細かいことが出来にくくなっていった。母は自分がこんなになるとは思いもよらず、悔

しい気持ちをどこに向けていいのか、私に当たることもあった。そんなある日のこと、病院での検査結果を聞いて驚いた。「ご家族様も中へ…」医師から「厳しいことを言うようですけど、〇〇のため身体障害者です。すぐに手術と福祉の手続きその他諸々の手続きをしてください。」悲しんでいる場合じゃなかった。父は事務手続きが苦手ですべて娘の私がやった。最後の手続きに、【障害年金】の申請をした。某市にある年金事務所は自宅から徒歩10分もしない場所にあるため、必要書類を全て持って歩いて行った。とても混んでいたので一時間は待った記憶がある。自分の番号が呼ばれ、手続き中になんとなく涙が出てしまって、年金事務所の方が「ゆっくりで大丈夫ですよ」と声をかけてくれた。他にも待っている人が沢山いるのに、この一声で余計に涙が出てしまったのを覚えている。

障害年金の手続きも終わり、結果通知が届き母と父と驚いた。毎年年金は減少傾向にあると聞いていたのにもかかわらず、意外といただける年金額が多くてびっくりした。母は「身体障害者になったから、年金の有難味が痛感できた。」と細くなった手に通知を持ち、両目の視力がほぼないのに通知を眺めて、そう話していた。

そこから約7年、障害年金を受け取りました。障害者になっても健常者と同様に生活の基盤を作っていた母は喜んでいました。自分の好きな物を食べたり、孫にお小遣いを渡したりしていました。このことがきっかけで、年金に対する理解が深まり、働く人が納めた年金保険料が多くの人を支えていること、母の障害年金で改めて意味があることに気づきました。いつしか、自分も誰かの支えで生きていること、身に染みるのであろうと。